

もう一つの《読ミ物》

西野春雄

能の小段のなかに、起請文や願書などの文書を拍子に乗せて読みあげる特殊な平ノリ型の謡（読ミ物）がある。読み下し漢文調の、最も散文的な文章を、大鼓・小鼓の拍子に乗せて緩急面白く謡いあげる小段である（周知の通り拍子不合の文書は読ミ物といわない）。

この小段は先行芸能の平曲の読物に学んだものらしい。平曲には康頼祝詞・山門牒状・南都返牒・文覚勸進帳など13曲あるが、読み下し漢文調の文章を、語るというよりも読みあげる調子といい、口説・散らし（拍子に乗った部分）・拾（早い速度の勇壮な部分）などの曲調によるテンポの変化といい、その技法の一端は能にも生かされているようだ。

しかし、能の（読ミ物）はクセや上ゲ哥など他の平ノリ型の小段に比べてかなり異格である。戦勝を祈る願文、神仏に誓いを立てる

起請文といった、最も拍子に乗りにくい散文を拍子に乗せるのだから、作曲上かなりの無理を重ねている。トリやオクリや片地を多用する拍子当たりの複雑さ。その無理を巧みに謡いこなしてリズムを生かすところが面白いのだが、技術的に至難なので、どの流儀でも習事に定めている。現行曲では「安宅」の勸進帳、「正尊」の起請文、「木曾」の願書の三つしかなく、これを「三読物」と呼んでいるが、たしかに独吟としての魅力もある。

ところで、この読ミ物を能に取り入れたのは信光が最初ではないかと推測されている。右三曲の作者を検討してみても、「安宅」は信光とする説が支配的だし（厳密には不明とすべきだが）、「正尊」は信光の子の長俊であり、「木曾」は古名を「埴生八幡」といい、『自家伝抄』では十郎作とする。いずれも観阿弥や世阿弥以後の作者であるし、観阿弥以前の古作や世阿弥たちの能に読ミ物が使われていない点を考えると、さきの推定も生きてくる。疾風怒濤の創成期の作者たちよりも、謡い事

や囃子事（舞事・働事・出入事）などに技巧が加えられてきた爛熟期の作者の工夫と見るほうが妥当だろう。

さて、現行曲では三つしかない読ミ物であるが、廢曲に眼を転ずるともつとある。たとえば「木曾」と同様の構想を持つ「篠村」の願書がそうであり（『未刊謡曲集』五所収）、ここに取りあげる「吉備」（吉備大臣）の野馬台の詩もそうである（同。四所収）。特に「吉備」は他の作品がいずれも軍記物に取材しているのに対し、遣唐使・吉備真備の中国での事件に材を取った作品だし、構成の上でも、

他が現在能であり、「吉備」は夢幻的現在能である。しかも全体の構想が靈驗物の「張良」とよく似ている。ともにワキが活躍する曲であり、急流に押し流されつつ沓を拾い黄石公に捧げる張良の試練と、日本の未来を予言したものとして有名な野馬台の詩の「乱行不同」の讖文（＝予言の文章）の朗読を試される吉備の試練とが好対照を見せる。「吉備」の眼目の読ミ物はトリやオクリや片地を駆使して技

巧をこらしているが、劇中の吉備以上に作者にとつても腕の揮い所だったかもしれない。

「吉備」は『観世』（昭和9年8月号）に推測演出を加えて翻刻されたことがある。底本に浅野栄足自筆本を用い、野々村戒三氏を中心に小林静雄・松野奏風氏らが担当され、出入事や装束などについて面白い見解を出しておられる。まず梗概を記すと、——遣唐使

吉備真備（ワキ）は中国側が次々に繰り出す難題に困惑し、帰国も叶わぬ自分の境涯を憂い、悲しみに沈んでいると、異形な阿部の仲麿の亡魂（前ジテ）が忽然と現れ、異国の地に果てた悲しみと、死してなお望郷の念の強いことを訴え、明日、王宮で大事な囲碁の勝負のあること、それに対する必勝の策術を教えて消えた（中人）。官人（アイ）は吉備が囲碁の勝負に勝ったこと、今また詩文を読めとの宣言があったこと、進退谷まった吉備があらたな霊夢を蒙ったことを告げる。いよいよ、

当日武帝（子方）以下諸侯（シテヅレ）の登

場、続いて吉備（後ワキ）が参内する。「乱行不同の詩にてたやすく凡慮の及ばざる」野馬台の詩を読む段である。見事に読みあげたなら帰国が許される。吉備は東に向つて目を閉じ、夢中に示現された奇特を見せ給へと長谷観音に祈念すると、空から蜘蛛が文字の上に舞いさがり糸を引いて渡つた。蜘蛛の糸を知るべに高らかに読みあげる吉備、驚嘆する武帝と居並ぶ揃紳。突然、宮中は鳴動し、仲麿の霊（後ジテ）が出現する（早笛で登場）。神国日本の王威を示し怒りをなし（働キ）、トメ。全体の小段構造を見ると、前場は問題ないが、武帝の登場樂を何にするか（真ノ来序がふさわしいが、サシの謡がない）、独り言で登場する後ワキの出は何がよいかなどいろいろ問題があり、後場は破格の構造が目立つ。さて、吉備が初瀬観音の霊験によって力強く読みあげた野馬台の詩とは梁の宝志和尚の作と称する予言だが、次に時拍子に従つて示してみよう。

東海妃氏国、百世天工に代り、右司補翼た

り、衡主元功を、建つ初めには、治法の事をおこし、終には、祖宗を祭る事をなす。

打切 本技天壤に、周く君臣、始終を定む、

谷填田孫に走り、魚膾羽を生じて翔る、葛の後、干戈動き、中頃微にして、子孫昌むなり、白竜游ひで、水を失ひ、窘急、にして胡城によす、黄雞人に代つて食し、黒鼠、牛腸を喰ふ、丹水流れ尽きて、後、天命三公にあらん、百王流れ、悉く尽きて猿犬、英雄と称す、星流れ野外に飛び、鐘鼓国中に喧すし、青丘と赤土と、茫々として、遂に空とならん。

一読して、拍子に乗せるため前句と後句をつなげたり、一句を分離するなど相当に無理をしていることがわかる。ワキを目立たせるべく作つた能だが、あまりにも特殊な読み物ゆえに廃曲となつたのだろうか。なお、南都返牒にも馬台の讖文のことが見えるが、子の説話そのものは主に『江談抄』に拠つたものと思われる。